

いのちをいただく

その絵本の帯に、一人の名もない主婦のメッセージが書かれていた。

「朗読を聞いて、うちのムスメが食事を残さなくなりました」
絵本に「坂本さん」という人が登場する。実在の人物である。

坂本さんの職場では毎日毎日たくさんの牛が殺され、その肉が市場に卸されている。牛を殺すとき、牛と目が合う。そのたびに坂本さんは、「いつかこの仕事をやめよう」と思っていた。

ある日の夕方、牛を荷台に乗せた一台のトラックがやってきた。「明日の牛か・・・」と坂本さんは思った。

しかしいつまで経っても荷台から牛が降りてこない。不思議に思っただけでみると、10歳ぐらいの女の子が、牛のお腹をさすりながら何かを話しかけている。その声が聞こえてきた。

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ・・・」

坂本さんは思った、「見なきゃよかった」

女の子のおじいちゃんが坂本さんに頭を下げた。

「みいちゃんはこの子と一緒に育てました。だけん、ずっとうちに置いとくつもりでした。

ばってん、みいちゃんば売らんと、お正月が来んとです。明日はよろしくお願いします・・・」

「もうできん。もうこの仕事はやめよう」と思った坂本さん、明日の仕事を休むことにした。

家に帰ってから、そのことを小学生の息子のしのぶ君に話した。しのぶ君はじっと聞いていた。

一緒にお風呂に入ったとき、しのぶ君は父親に言った。「やっぱりお父さんがしてやってよ。

心の無か人がしたら牛が苦しむけん」

しかし坂本さんは休むと決めていた。

翌日学校に行く前に、しのぶ君はもう一度言った。「お父さん、今日は行かなんよ！

（行かないといけないよ）」

坂本さんの心が揺れた。そしてしぶしぶと仕事場へと車を走らせた。

牛舎に入った。坂本さんを見ると、他の牛と同じようにみいちゃんも角を下げて威嚇するポーズをとった。

「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならないとみんなが困るけん。ごめんよう」

と言うと、みいちゃんは坂本さんに首をこすり付けてきた。

殺すとき、動いて急所をはずすと牛は苦しむ。坂本さんが「じっとしとけよ、じっとしとけよ」

と言うと、みいちゃんは動かなくなった。

次の瞬間、みいちゃんの間からは大きな涙が落ちた。

牛の涙を坂本さんは初めて見た。

心を込めて「いただきます」「ごちそうさま」を

